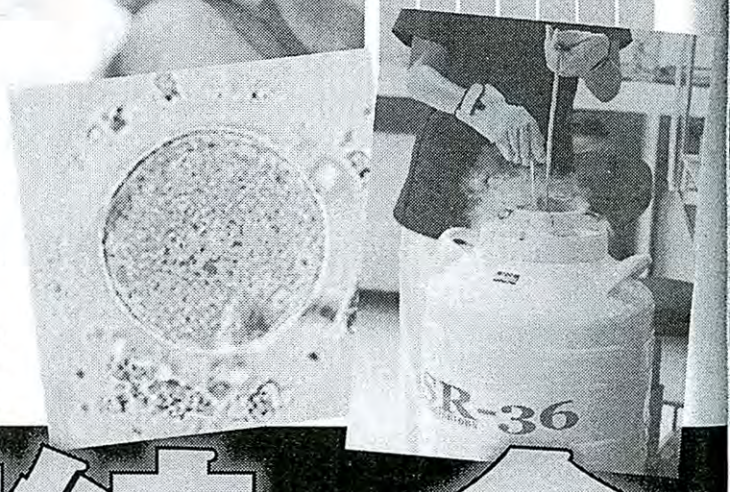
NHK
『クローズアップ現代+』
で大反響！



今は無理だけど、いつかは絶対に子供がほしい——そう望む女性の間で、急速に広がっている卵子凍結。卵子老化を止め、キャリアと出産を両立できると女性にとっての福音だと注目されていたが、NHK『クローズアップ現代+』が明らかにしたデータに衝撃が走った。晩婚化・晩産化が進む日本に希望をもたらしてはくれないのか？



子供を望む女性にとって本当に福音なのか——衝撃の大規模調査から見えてきた課題と限界とは？

卵子凍結の今

大切なのは、男性も女性と育児をするという意識改革だ

マイナス196℃の液体窒素が入ったタンク。そこには凍結した卵子が入っている——

10月26日に『クローズアップ現代+』（NHK）で『老化を止める？〝卵子凍結〟の真実』と題した番組が放送された。その冒頭で、驚くべき調査結果が示された。

NHKが全国の高度な不妊治療を行う医療機関を対象に独自の調査を行ったところ、**40以上の医療機関でおよそ1000人の女性が卵子凍結を行っていることが明らかになったのである。卵子の数の合計はおよそ9000個。これだけの数の〝命のもと〟が、いつか来る出番を静かに待っている。**

同番組では、そうしたNHK独自の調査結果とともに、凍結した卵子を用いていつの日か出産したいと望む女性たちの〝今〟について特集し、大きな反響を呼んだ。

同番組のディレクター・丸岡裕幸さんはこう語る。

「これほど多くの女性が卵子凍結を行っているということにまず驚きました。ある程度の数はあるだろうと思っていましたが、その予想を大きく超えていました」

これまでその実態が全くわかっていなかった「健康な女性で凍結卵子を使った出産経

卵子凍結さえしておけば、いくつになっても子供を産めると思っていたのに…

験者」がすでに10人以上いることも同番組で明らかになった。それは凍結した卵子を解凍して体外受精による妊娠を試みた女性およそ90人中、出産にまで至った人の数だ。

「この数字は、卵子凍結が将来の出産を約束するものではないことを示しています。卵子を凍結さえすれば、出産までの時間が猶予されると考えるかたもいますが、現実には必ずしもそうではなかったことがわかりました」（丸岡さん）

決して高いとはいえない割合に、卵子凍結を福音と考えていた女性たちからは悲鳴のような声が上がった。

「うまくいった人の割合がこんなに低いとは思わなかった。卵子凍結さえしておけば、いくつになっても子供を産めると思っていたけれど、そうじゃないということにショックを受けました」（41才・未婚女性）

「仕事が忙しくて今すぐは産めないと思っていたので、卵子凍結は選択肢として考えていた。もっと多くの人が成功していると思っていたのに…」（37才・既婚女性）

その衝撃は、女性たちが卵子凍結に抱いていた高い期待の裏返しともいえるだろう。今、卵子凍結は女性たちにどのような光をもたらし、影を作り出しているのか。

アラフォー女性の7割超が肯定

卵子の数は胎児のうちに決まっている。卵子のもとになる細胞は、その時期に一生分が作られるからだ。その数はおよそ700万個。しかしその数は出生時には約200万個に減少し、初潮を迎える思春期までに20万～30万個にまで減る。その後も年齢を重ねるごとに数が減っていく。

数が減るだけでなく、質も下がっていく。つまり妊娠しにくくなるのだ。

大阪市にあるオーク住吉産婦人科の医師、船曳（ふなびき）美也子さんが語る。

「妊娠率は32才くらいから減り始め、37才くらいから年を追うごとに急減していきます。40才を超えると、それがさらに加速して、たった1才年を重ねただけでも、卵子が持つ妊娠する能力はかなり衰えます」

この卵子の老化が注目されるようになったのは、'12年のこと。きっかけは、同年2月に放送されたNHK『クローズアップ現代』、同年6月に放送されたNHKスペシャル『産みたいのに 産めない～卵子老化の衝撃～』だ。多くの女性たちが卵子が老化することを初めて知り、それが不妊につながることに衝撃を受けたのだ。それならば、老化する前の、妊娠する能力の高い卵子があるうちにそれを採取し、保存しておきたい。そう考える女性たちによって、卵子凍結に熱い視線が注がれるようになった。

「今は忙しくて産めない」「まだパートナーに巡り会えていない」――そんな社会的な理由で選ぶ人が増えているのだ。

その選択に対しては、多くの人が肯定的になっている。

10月14日に岡山大学が発表した全国調査の結果によると、健康な女性の卵子凍結を「認める」は27・9％、年齢制限など「条件付きで認める」が28・3％と計56・2％、肯定派が過半数を占めた。前回の'14年に発表した調査では、肯定派は約27％だったので、この間にその数は倍増している。

子供のいないアラフォー女性からの支持率はさらに高い。子供のいない35～39才女性の88・4％、子供のいない40～44才の72・7％が肯定する結果になった。調査を行った岡山大学教授の中塚幹也さんはその背景をこう分析する。

「まず、卵子凍結の技術がより身近になってきていることが挙げられます。とりわけ、〝当事者〟である女性たちにとっては、『認める』ということ以上に、やってもいいと前向きに考える人が増えたのでしょう」

先の『クローズアップ現代＋』では、卵子の凍結を行うクリニックが行うセミナーに女性たちが殺到している姿が映し出された。こういった変化に同調するように、少子化対策の一環として卵子凍結を希望する34才までの女性に対して助成を行う自治体や、卵子凍結にかかる費用の3割を会社負担とする企業も出始めている。

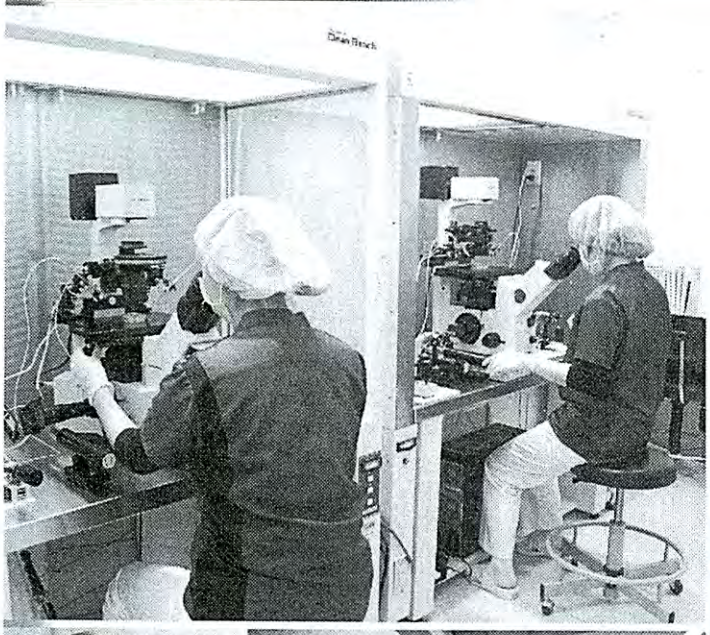
卵子の採取に300万円の費用

『クローズアップ現代＋』では、卵子凍結によって出産した例も紹介している。40代半ばの女性は、凍結卵子を使って出産した。卵子凍結を行ったのは30代後半、独身のとき。看護師として夜勤を含む激務を続けるなか焦りを覚え、それでもいつかは子供がほしいという思いで踏み切った。

「卵子の老化をいったんストップできた」



自分の卵子が眠っていることは〝いつか産める〟という安心感につながっています







オーク住吉産婦人科では採取された卵子は培養室へ（下右写真）。解凍した卵子を使って顕微授精を行う（上写真）。船曳さんは自身も不妊に悩み、体外受精で44才で初めて妊娠、出産した経験を持つ（下左写真）。

手術を受けた後、そう感じたという。40才を過ぎて結婚し、最初は自然妊娠を試み、その後、体外受精を繰り返したが子供には恵まれなかった。ところが、凍結しておいた卵子を使ってみたところ、すぐに妊娠。理解されるか不安だった女性は夫へ凍結卵子を使ったことを伝えていなかった。伝えたのは出産後。彼女の不安とは裏腹にとても喜んでもらえたという。

現在、子供は保育園に通うまでに成長している。女性は現状についてこう語っていた。

「川の字で寝てるときに、ああ、何か平和だなって思います。いちばん好きな人との間に子供を授かって本当によかったと思います」

このように、卵子凍結は子供がほしいと思いながら難しくなっていた場合や、今ではなく少し先の結婚と出産を望む女性たちにとって、可能性を開く希望の光となりうる。

オーク住吉産婦人科では現在、36～47才まで342人の卵子を凍結した状態で預かっている。採卵から妊娠に至るまでの流れは右ページの図の通りだ。卵子凍結を女性が選ぶ理由はさまざまだが――

「最も多いのは、まだ結婚していない30代後半から40代前半の女性です。将来、自分の卵子で妊娠したいと願っていて、結婚相手が見つかったときに不妊治療をすぐに行うためにある種、〝保険〟として卵子凍結を望むのです」

会社員のA子さん（40代半ば）もその1人だ。1年半ほど前に、同院で卵子凍結のための手術を受けた。

「最初は悩みました。未婚でパートナーもいない私が不妊治療を受けるということにためらいがありました。でも、誰にも相談できませんし、自分で決めなきゃいけない。私は何が幸せだろうと考えたときに、やっぱりいつかは結婚して子供もほしいって…」（A子さん）

A子さんは、卵子を採取するために9回の手術を受けている。手術に要した時間は1回あたり10～15分ほど。計10個ほどの卵子を凍結へとまわすことができた。

「1度の手術で採取できる卵子の数は個人差がとても大きいです。また、年齢が高くなれば卵子の数そのものが減っていきます」（船曳さん）

費用は、A子さんの場合、300万円かかった。

「決して安い金額ではないですが、それでも自分の幸せはお金にかえられませんから。長く会社員をやっているので貯金を切り崩して何とか工面しました」（A子さん）

採取手術の後にも費用は発生する。同院の場合、10個の卵子を採取し、5年間凍結保存するのに50万円が、3つ単位で卵子を解凍して顕微授精させ胚移植するのに25万円が必要となる。A子さんのように、1度の手術で採取できる卵子の数が少ない場合はさらに費用がかさむ。出産にかかる費用は別途必要になる。

それだけの費用がかかっても、A子さんは卵子凍結という選択をしたことで、気持ちが晴れやかになったと話す。

「自分の卵子が眠っていることは〝いつか産める〟という安心感につながっています」

40才での出産率はわずか6％

しかし、採取した卵子で、その後、妊娠・出産できる保証があるわけではないのは、冒頭で示した通りだ。

A子さんのように40代で卵子凍結を行う女性も多いが、妊娠・出産に至るのは決して簡単ではないのが現実だ。

「出産率は年齢とともに下がっていきます。1個の凍結卵子による出産率は、採卵時の年齢が30才で11・3％、35才では8・3％。40才で6％です」（船曳さん）

40代半ばで採卵したA子さ

卵子凍結はあくまで〝最後の一手〟です。精神的に余裕が生まれ、自然妊娠に至ったというケースが増えればと――



んの出産率はもっと低くなる。それが安心感となるか、それとも出産が難しくなる現実を覆い隠しているのかは、人によって捉え方は違うだろう。

同院では、卵子の解凍をした12例のうち、妊娠したのは6例で、そのうち出産にまで至ったのはわずか2例だけだ（他2例は現在、妊娠中、他2例は妊娠したが初期流産）。

妊娠にまでこぎ着けたとしても、高齢出産のリスクは消えない。日本生殖医学会が、ガイドラインで**《40才以上の卵子の採取は推奨できない》《保存卵子を使った45才以上の不妊治療は推奨できない》**としているのはこのためだ。

ガイドラインの作成にかかわった元日本生殖医学会理事長で、慶應義塾大学名誉教授の吉村泰典さんが語る。

「若いうちに卵子を採取しておけば、妊娠できる可能性は高いのですが、高齢出産には、切迫早産や切迫流産、妊娠合併症などさまざまなリスクが加わります。それは卵子を凍結しようが全く変わりません。医師の側はそれをしっかりと説明すべきですし、卵子凍結を希望されるかたにも、充分に理解してからやってほしいと思います」

そもそも、卵子の採取の際に体にかかる負担も決して小さくない。

「1度の採卵でできるだけ多くの卵子が取れるよう、排卵誘発剤を使って卵巣を刺激します。これは卵巣内の卵胞、つまり卵子の家を育てることになるので、卵巣が腫れてしまい、卵巣過剰刺激症候群を引き起こすことがあります。採卵した日はお腹が痛くなったり、なかには1週間ぐらいお腹が張ったり、歩くと響いたりという症状が出ることもあります。また、採卵には細長い針を使うのですが、それが誤って腸や血管に刺さった場合には大出血を引き起こします」（前出・船曳さん）

凍結卵子の保管業務のほか、セミナーやカウンセリングも行うプリンセスバンク代表の香川則子さんも、相談に訪れる人に対して「卵子凍結をしたほうがいいとは言っていません」と言う。

「卵子凍結をしなくても妊娠を望める環境にあるかたには、そちらをお薦めしています。卵子凍結はあくまで〝最後の一手〟です。将来に備えて卵子を採取して凍結させたことで精神的に余裕が生まれ、自然妊娠に至ったというケースが増えればと思っています」

手放しで奨められるものでない――

そういった声は、凍結卵子で出産に至った女性の中からも聞こえてくる。

前出の丸岡さんが、卵子凍結で出産した先の女性に取材したときのことを振り返る。

「彼女は医師からも高齢出産のリスクについて説明を受け、流産するのではないかという恐怖におびえながら10か月を過ごしました。インタビューで彼女は〝卵子凍結には、諸手を上げて賛成はできない〟と言っていました。卵子凍結で出産した女性がそう発言することに、たいへん驚きました」

卵子凍結による出産――成功の裏にもまた、あまり語られてこなかった厳しい現実も潜んでいるのだ。

仕事も子育ても「輝き」求める社会

政府は今、「すべての女性が輝く社会づくり」に邁進している。しかし、これは女性にとっては重荷でもある。あたかも、外で仕事をして、家で家事をして、子供を産んで育てて、あらゆる面で役割をこなしてようやく「輝いている」と認められるかのような気がしてくるからだ。

しかし現実には、夫の協力が得られないばかりに子育てのために働くことを諦めて経済的に苦しくなる女性も、仕事が忙しいために妊娠・出産だけでなく結婚も後回しにせざるを得ない女性もいる。

みんながみんな、卵子を凍結させる必要に迫られる前に、出産に踏み切れるわけではない。

前出の吉村さんは、卵子凍結を望む女性が増えている事実をこう受け止めている。

「それは、女性がいけないのではありません。変わらなければいけないのは社会全体の意識ではないでしょうか。男性も、女性と一緒に育児をするものだという意識を持たない限り、現状は変わらないと思います」

いつかやってくるかもしれない出番を待ちながら冷たいタンクの中で眠るおよそ900個の卵子の存在は、歪んだ現代日本社会を象徴しているのかもしれない。



香川さんが代表を務めるプリンセスバンクでは、現在471人、779個の卵子が保管されている。

撮影／武美静香、矢口和也